手術困難例に対する早期胃癌の レーザー内視鏡治療の成績と問題点

林 琢也、田尻久雄、東納重隆、小林正彦、
川口 淳、金沢雅弘、永尾重昭、宮原 透、丹羽寛文

防衛医科大学校第二内科

The clinical course and problem in laser treatment for inoperable case with early gastric cancer .

Takuya Hayashi, Hisao Tajiri, Sigetaka Tohnoh, Masahiko Kobayashi, Atsusi Kawaguchi,
Masahiro Kanazawa, Sigeaki Nagao, Tooru Miyahara, Hirohumi Niwa

The clinical course and problem in laser treatment for inoperable case with early gastric cancer were studied. The reason why they were considered to be inoperable were severe heart failure (4cases), severe renal failure (4cases), liver cirrhosis with easy bleeding (3cases), case more than 85 years old (2cases), and others (3cases). Six cases had early gastric cancer with absolute indication for endoscopic therapy, that is IIa type and IIc type without ulcer less than 2 cm in size of differentiated adenocarcinoma. Nine cases had early gastric cancer with relative indication. Follow-up study by endoscopic biopsy for more than 6 months was performed in 12 cases out of 15 cases and showed recurrence or remnant in 2 cases. One was absolute indicative case and the other was relative indicative case. It seems that laser therapy is effective for relative indicative cases with early gastric cancer.

【緒言】

局所的治療のみで根治が可能と考えられる病変の臨床病理学的検討および、レーザー治療や内視鏡切除術（以下ER）の開発により、早期胃癌の内視鏡治療は広く普及している。我々は内視鏡的治療のみで根治が期待できると考えら

れる絶対的適応症例に対しては、原則として病変組織の回収可能なERを第一選択としている。しかしながら、重篤な全身合併症や高齢のため、外科的手術が困難と考えられる早期胃癌の症例に対しては、レーザー内視鏡治療単独あるいはERと併用して治療することもある。すわわち、

治療法	手術困難例	手術可能例	計
レーザー治療	11	0	11
ER + レーザー治療	4	4	8
ER*	5	12	17
*ER内視鏡切除術	20	16	36

(1990年10月から1993年6月防衛医大第二内科)

図1早期胃癌内視鏡治療例の内訳

部位的にERが困難な症例、潰瘍性変化が強い症例等には始めからレーザー治療を選択している。今回過去2年8カ月間に経験した手術困難例に対するレーザー治療の成績と問題点について検討したので報告する

【対象・方法】

対象は1990年10月から1993年6月までの2年8カ月の間に、当科にて内視鏡治療を行った早期胃癌36症例のうち何らかの原因で手術が困難と判断されレーザー治療を行った15症例である。レーザー治療単独は11例で、ER施行後レーザー治療を追加をした症例が4例である。手術困難と判断された理由は図2のごとく重篤な心不全4例、人工透析中を含む重篤な腎不全4例、出血傾向を認める重症の肝硬変3例、高齢（85才以上）2例、他臓器癌の合併1例、類天疱瘡治療にてステロイド離脱不能例1例であった。肉眼型、大きさ、部位を図3に示すが、リンパ節転移がなく局所治療にて根治可能と考えられる内視鏡治療絶対的適応例（分化型腺癌で2cm以下のUI(-)のIIcおよび2cm以下のIIa）は6例で、他の9例はいわゆる相対的適応例であった。これらのうち6カ月以上経過観察可能だった12例治療後経過を検討した。

重篤な心不全	4
重篤な腎不全	3
肝硬変（血小板5万以下）	3
高齢（85才以上）	2
他臓器の癌	1
その他	2
計	15

図2手術困難例の内訳

肉眼型	部位
IIc UI(+)	C 5 A 2
UI(-)	M 3 S 9
IIc+III	A 7 P 3
IIa+IIc	G 1
IIa	
I+IIa	
計	15 15
内視鏡治療適応例	大きさ
IIa, <2cm	~2cm 7
UI(-)IIc, <2cm	~3cm 5
計	3cm ~ 3
	計 15

図3手術困難例の肉眼型、大きさ、部位

【結果】

図4に、内視鏡治療後の遺残・再発の有無を示した。内視鏡治療絶対的適応例6例中1例に、また相対的適応例9例中1例に遺残・再発を認めた。治療適応例で再発を認めたものは、幽門部小彎のUI(-)の1.5cmのIIcで大動脈閉鎖不全症、および心不全にてレーザー単独治療を1回行った。術後3カ月まで生検で癌陰性であったが、6カ月後に遺残・再発を認めた。本症例は、病変の正面視が困難なため、照射が十分でなかった部位があったものと思われる。相対的適応例で遺残・再発を認めたものは、弓隆部の2cmのIIa+IIc病変で、部位的に治療が困難なことに加え、sm浸潤が中等度以上であったためと思われる。本症例は人工透析中で、また83才と高齢のため、現在癌陽性のまま、経過を観察中である。

	遺残・再発	
	(-)	(+)
Ila, <2cm	3	
Ilc UI(-), <2cm	2	1
Ila, I, >2cm	2	
Ila+IIc		1
Ilc UI(+)	3	
	10	2

(治療後6カ月未満、不明例の3例を除く)

図4内視鏡治療後の経過

【考察】

手術困難例に対するレーザー治療の成績を検討した。12例中10例が遺残・再発なく6カ月以上経過している。また相対的適応例も9例中に遺残・再発を認めたものは1例のみでレーザー治療の有用性が確認されました。現在我々が考える手術困難例に対する内視鏡治療の選択を図5に示す。まずERを第一選択とするが、噴門部や胃体部後壁等の部位的にERの困難と考えられる症例、あるいは、肝硬変で血小板数が低下し出血傾向があるものは、最初からレーザー治療を第一選択にしている。また、病変部位が広い症例や、sm浸潤が中等度以上と考えられる症例にはER後レーザー治療追加、ないしはレーザー治療単独で経過を観察している。

手術困難早期胃癌に対する治療法の選択

手術困難な早期胃癌

【結語】

手術困難な早期胃癌症例に対するレーザー治療の成績を検討した。レーザー治療は内視鏡治療非適応例にも有効性が確認され、手術困難な早期胃癌の治療の選択にあたっては、病変部位、大きさ、深達度診断の限界を考慮に入れ、また全身合併症、高齢などのため長期にわたる経過観察が困難なこともあることを十分念頭において治療方針を決めるべきと考える。